

氏 名 劉 征宇

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2127 号

学位授与の日付 2020 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌
—社会主義制度下(1949-2018年)の天津市の事例—

論文審査委員 主 査 教授 野林 厚志
教授 池谷 和信
教授 檜永 真佐夫
教授 西澤 治彦
武蔵大学人文学部
教授 朝倉 敏夫
立命館大学食マネジメント学部

(様式3)

博士論文の要旨

氏 名 劉 征宇

論文題目 中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌
-社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例-

本研究の目的は中華人民共和国（以下「中国」）の天津都市住民を事例とし、歴史資料、計62世帯の事例調査のデータと3人のライフヒストリーの記述に基づいて、1949年から現在の2018年までの70年間にわたる都市住民の食生活を描いた上で、社会主義体制下の都市住民の家庭食の持続と変化を、家族関係と社会制度の分析を通して明らかにすることである。

現代中国の食を対象とした人類学的研究は1970年代に本格的に始まり、人類学的議論の流れや分析の視点の転換によって3つのテーマ、すなわち食文化の全体的特徴、グローバル時代における食消費の変容、及び社会構造変動下の食実践の持続に沿って展開してきた。これらの先行研究によって、中国全体あるいは個別の地域料理の特徴、食システムの転換と人々の食消費の変容との動態的關係、及び人間関係や觀念の活用と食実践の持続との關係が明らかになった。ただし、調査の時代や対象に関わる制約によって、毛沢東時代（1949-1978年）の食生活に関する記述の欠如、及び家族内部の食事情に対する考察の不足という2点の課題が指摘できる。

それゆえ、本論文での考察は上記の先行研究の成果を生かした上で、既存の課題を克服するために以下の2つのアプローチによって、1) 家庭の食事に焦点を当てて、個人のライフヒストリーのアプローチを導入し、20世紀中期以降の中国人の個人の食生活を通時的に記述する、2) 家庭の食事、家族関係と社会制度という三者の關係に焦点を当てて、食実践と社会關係との関わりというアプローチを活用しながら、家族内外の人間關係の構築、維持や活用が、人々の食実践の持続と変化に与える影響を考察する。

本論文は、研究の目的と問題意識を述べた序章、天津都市住民の食生活に対する記述である第一章から第四章、考察と結論が書かれた終章で構成される。

序章では、本研究の目的を述べて、先行研究を整理しながら本研究の理論的視座と方法論を提示し、調査概要と本論文の構成を記している。

第一章では、社会主義改造以前の天津都市部の食文化の特徴、及び都市住民の食生活の状態を明らかにした。具体的には、民国期（1911-1949年）の天津に関する歴史資料や先行研究をふまえながら、物産の種類、地域料理の文化的特徴、及び地元住民の日常食と行事食の様式に焦点を当てて、天津地域における料理の多地域かつ重層的特徴、及び地元住民の日常食と行事食の食事様式に存在する階層的差異と旧習の持続性を提示した。

第二章では、現在（2018年）の天津都市住民の食生活に焦点を当てて、計62世帯の調査データ及び具体例としての2世帯の詳細な記録に基づいて、都市家庭の日常食と行事食の様式をとりあげて、食生活の実態と特徴を以下のようにまとめた。

現在の天津住民の日常食は一日3食を基本に、国内外の多地域の具材、調理法や味付け

によって作られ、多彩な組み合わせで構成されている。それと同時に、行事食に関しては、1年の間に誕生日、年中行事、宗教的祭日・齋日の際に用意されている特別の料理を中心とし、家庭円満や無病息災などの願いが込められている。第一章で取り上げた民国期の食生活と比べると、現在の日常食には、天津料理の伝統的な要素が依然として維持されている一方で、健康的・養生的効果がある食品・料理、または安全性が高い食材・食品を常食するという変化が見られる。行事食に関しては、旧暦に従って伝統的な行事が維持されているが、国家の法定休日（春節や中秋節、端午節、清明節）以外の年中行事に行事食を取らないことも多くある。

上記のように、第二章の記述を通して、現在の天津都市住民の日常食と行事食の様式における伝統の継承と新たな変貌が明らかになった。その上で、これらの持続と変化に影響を与えた家族内外の要素、すなわち家庭内における個人の食習慣、生活経験と家族関係、及び家庭外における食システムの実行状態、食情報の流れと人間関係の利用も提示した。

第三章では、個人の食生活史に対する詳述を通して、家庭内部の要素が家庭の食事情にもたらす影響を解明した。具体的には、第二章で具体例としてあげた親子関係にあたる老婦人Z、息子Lと息子の妻Sという3人のライフヒストリーを詳述し、1930年代以降の天津都市住民の家庭食事の実態を通時的に描いた。その上で、家族内部の要素に焦点を当てて、家族の経済状態及び家族関係（主に夫婦関係や親子関係）が家庭の食事情、すなわち食事のとり方・構成内容、料理の組み合わせ・味付けに与える影響を明らかにした。

第四章では、家族外部の要素に着目し、食システムの転換が都市住民の家庭の食事にもたらす影響を明らかにした。具体的には、歴史文献、統計データ及び天津住民の語りを通して、食物の販売ルートの仕組みを3つの時期に分けて整理した上で、人間関係の利用、保存食の手作り、及び食の情報に関わる経験の活用に関心をもち、各時期における食材の入手・確保をめぐる人々の対処方法を詳述した。このように、家族外部の要素、すなわち人々の在住する地域の地理環境と物産の種類、食物の供給状態、及びマスメディアに流布される食の情報が、食材の入手・確保に関する実践や観念に強い影響を与えて、家庭料理の具材選択、組み合わせと味付けに緊密に関係することが明らかになった。

以上のような天津都市部の食生活に関する歴史民族誌の記述を通して、終章では以下の3点の結論をまとめた。

1) 天津都市部の家庭料理の伝統的な特徴は、中国の北部と南部の多地域及び西洋の食文化の要素が混在して形成されたものである。これは天津地域の地理的環境、風俗習慣及び近代以降の都市発展の歴史に緊密に関係する。

2) 家庭食事の持続と変化のメカニズムに関しては、家族内部において、性別の役割分担、親の扶養と子供の養育に関わる夫婦関係や親子関係が、家庭料理の組み合わせと味付けに影響を与えて、家庭の食事に関する実践の持続と変化に作用していると言える。それと同時に、食物配給制の実施と廃止を含む社会制度の変化において、食システムの制約や食の情報を受けた人々は、様々な縁故関係の利用を通して、必要な食材・食品の入手を確保し、家庭食事のスタイルを維持・調整できるようになることもわかる。

3) 毛沢東時代の食生活の実態とその影響について、当時の天津都市住民は、食物配給制の実施による様々な規制や制約を受けながら、穀物や野菜を基本にする均質な食生活

を送っていた。このような食生活において、人々は天津産の食品を家庭の食事に常に用いていたため、天津料理の特徴的な組み合わせ・味付けに関する文化的伝統を維持できるようになった。同時に、他の社会主義国の事例と類似したように、人々は配給制の実施による入手食物の不足を補うため、買いだめ、保存食の手作りや闇交換などの多種多様な戦略的手段を尽くしていた。これらの手段を頻繁に行っていた人々は、食材の確保に関する消費観念、野菜の季節の種類とそれに関する保存方法、及び希少品の入手に関わる人間関係の利用方法を身につけるようになった。このように、これらの食に関する習慣・観念及び人間関係の利用に関する意識は、毛沢東時代に暮らしていた都市住民に定着され、維持されるようになり、さらに彼らの食生活に現在までも影響しつづけている。

Results of the doctoral thesis screening

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 劉 征宇

Title
論文題目 中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌
-社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例-

本論文は、1949年から2018年までの70年にわたる中国の都市住民の食生活の実態を文化人類学のフィールド調査と歴史資料の分析により明らかにし、社会主義制度下から現在にいたる都市の家庭の食事の変遷を描いた歴史民族誌である。近年公開が進む統計資料や行政文書にもとづき、社会経済史等の分野で論じられてきた計画経済下の中国都市部における食料の供給システムのマクロな動態に対して、住民を対象とした聞き取りと参与観察による詳細なデータに即して、都市住民が実際にどのように食料を調達し、家庭の食生活を自律的に成立させていたかを明らかにしている。

出願者は、中国の天津都市部において、2013年から2018年までの間、約14ヶ月間の現地調査を断続的に行い、住民の食生活やライフヒストリーに関する聞き取り、食事の場での参与観察、食料配給に携わっていた公務員や食料品店の店員を対象とした聞き取り、実際に使用されていた配給券等の資料の収集を行った。

これらの調査で得られたデータの分析にもとづき、出願者は以下の構成、内容の論文を提出した。

序章では、中国の食文化の歴史研究、文化人類学の食文化研究を批判的にレビューし、中国の社会主義体制下の特に計画経済期における都市住民の食事の実態がこれまで明らかにされてこなかったことを指摘し、本論文の学術的意義を明確にしている。

第1章では、社会主義経済期以前の天津都市部の食生活に、華北を中心とする各地域の食材や料理が導入されていたこと、「津菜」とよばれる天津料理が宴席料理として発達したこと、貧困層、中間層、富裕層に対応した食事をめぐる階層の存在を明らかにした。天津が華北地域の重要な商業都市として発展し、国内外の生産物の重要な市場ならびに積載地であったこと、長期間にわたる大量資本の投入や早くからの貨幣経済の浸透、政治家や皇帝の一族の集中で接待用の宴席料理が洗練されていったという時代背景が論じられた。

第2章では、天津都市部における現在の日常の食事は、社会主義経済期以前からの天津料理の要素をひきつぐ一方で、家庭ごとに食事の様式や内容が多様化していること、健康や養生に効果があると考えられる食品や料理への志向が強い、といった特徴があるとともに、国家の法定休日である春節や中秋節、清明節では慣習的な行事食が維持され、法定休日ではない旧暦の節句等では必ずしもそうではないこと、世代をこえて継承されている誕生祝いの水餃子や端午節の粽といった縁起物の存在等、特別な機会の食の特徴も明らかにした。これらには、核家族が主流であり、それぞれの生活リズムにあわせて自律的に食事を選択しうる家庭の存在や、マスメディアからの情報が食の安全や健康への関心、行事食

への意識喚起を促している社会的背景が関与していることが論じられた。

第3章では、母親、息子、息子の妻の関係にある3人のインフォーマントの詳細なライフヒストリーにもとづき、1930年代から現在にいたるまでの家庭の食事の変化と連続性の様相を明らかにした。世帯の経済状況が、購入できる食材に影響を与えるとともに、料理の作り手が、家族の食の嗜好や健康状態へ配慮することにより食事の内容が決まっていく等、家庭の食事のもつ経済性や社会性が論じられるとともに、料理本や政府の宣伝、テレビやインターネット、海外のファッション雑誌等、食に関わる情報の内容や量が時代ごとに変化し、家庭の食事の内容にも影響を与えてきたことが明快に示された。

第4章では、食料の配給制度時代およびその後の市場経済復帰後に焦点をあて、食料供給システムの転換が都市住民の食生活に与えた影響を論じている。計画経済の実施によって食料の配給制が始まると、天津都市部の住民の食材の購入経路は、国営の単一的かつローカルな流通、販売ルートから構成されることになった。国家の規制を受けながらも、互助や闇交換といった人間関係を利用した食材の入手、限られた食材を活用するための調理方法や食材の新たな保存方法の考案等を通して、自律的な食生活を維持していった天津都市住民の姿が浮き彫りにされた。市場経済に復帰すると、食料の入手は配給制から自由売買へとかわり、個人、企業経営、ネット通販といった多様かつグローバルな流通・販売ルートを通して国内外産の食品を通年的に調達することが可能となっていった。人々は、前章でもとりあげた多様な食の情報もあわせながら、自らのニーズを満たした食事を実現させてきたことが論じられた。

終章では、華北地域を中心に中国の各地域の食文化の要素をとりこみ、天津都市部の家庭料理が維持、発展してきたこと、配給制や市場経済の導入により歴史的に変化してきた食料供給システムの下で、生活の基本単位である家庭の食生活が自律的に存立してきたことを結論づけた。

中国の社会主義制度下における都市住民の食生活の変遷を、実際の食事の内容、食材の入手方法や保存食のつくり方を調べ上げて明らかにした食文化研究はこれまでになく、また、中国の国家政策と家族との関係を考える家族史研究の基礎資料を整備することにも本論文は成功している。さらに、食料の生産様式や流通手段が大きく変化してきた20世紀の都市における家庭の食生活を消費者の視点から明らかにした本論文は、天津都市部の家族という個別事例研究にとどまらず、国家だけでなく市場やマスメディアなどともより直接的に関わりながら生活している都市住民の食生活を総合的に理解するための方法論的なモデルとなっており、食研究一般への貢献も大いに期待できる。

審査委員会は本論文のこれらの学術的な意義と貢献を高く評価する一方で、都市住民の多様性や重層性、社会経済史等の分野の知見、食事以外の生活のありかたについても、より積極的な議論が望まれるという意見が出された。とはいえ、それは本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ本研究が人類学と都市研究や社会経済史の分野との学際研究につながる可能性を内包しているとして、今後の課題としておきたい。

以上を総合的に検討し、審査委員会は全員一致で本論文が博士の学位を授与するに相応しいと判定した。